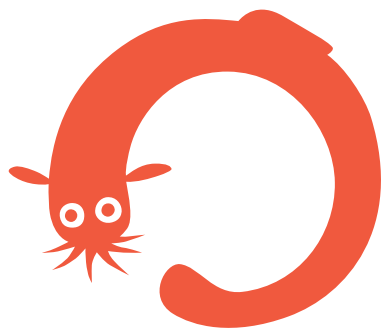


そうかわせみ、



Vol.10

そうかわせみ、

Vol.10



岡島弘子
ほうたい衣装 2



一色真理
食堂 4



伊藤浩子
たなかさん 6



相沢正一郎
街 10

ほうたい衣装

すでに失敗している
からだ という傷
ぐるぐるまきにしておおう
ほうたい衣装

かぎざきにはレースあみ
ほつれには 飾りポケット
すりきれたところには
アップリケ
しみには花の刺繍
なみだはシャネルの五番
空を失った鳥のように

水を失った魚のように
すべてを失った私だけほど

外見をととのえれば
傷はかくれて
やがていえる

かぜのペール
水のフリル
虫のなきごえのギャザー

樹の上にひろがる今朝の空の色
をまといえ

ほうたい衣装

トイレだと思って開けたのに、ドアの向こうはからんと広い食堂だった。誰もいやしないのに、古い扇風機がいやいやいや……首を振っている。テーブルは真中にひとつ。椅子は隅にふたつきりさつきまで誰かが黒いスープを、いやしい音をたてて啜っていた気がする。思い出した。三十年前に茶碗や皿を何もかも引っくり返して、もう戻ってこなかった父親の死体を、油の切れた自転車で引き取りに行ったのだっけ。ドライアイスを大量に詰めても、まだこの部屋から出て行かなかった鼻をつく臭い。いやいやいや……と、扇風機のようにぼくは首を振っていた。

あの日、月は足元を自分で照らしながら、ひとりで歩いて行っただ。満月は木綿豆腐だから、箸でかき回すと、スープの中でたちまち全部崩れてしまう。古い自転車は漕ぐたびに、いやいやいやいや

……と大きな音を立てたっけ。真っ黒になったぼろぼろの豆腐を、ぼくは自転車から降ろした。そして、お母さんといつしよに切り刻み、滾るお湯で煮てから、いやらしい音をたてて啜りこむ。それから、ぼくらは茶碗や皿を地面に投げて割り、古いお母さんはいいやいやいや……と首を振り続けた。あんたを見ると、吐きそうになるよ。満月を浴びると、殺したくなるんだ。ぼくはひとりでトイレのドアに向かった。

開けると、その向こうはからんと広い食堂だった。

たなかさん

伊藤浩子

たなかさんのことを知ったのは、五歳になる娘からだ。ママ、たなかさんっていう人がいるんだよ、たなかさんってみようじだけで呼んでいるんだよ、みんな、たなかさんが大好きなんだよ。

娘がいつどこでどんなふうにして、たなかさんのことを知ったのかはわからない。何度訊いても彼女は絶対にわたしに教えようとしなかった。仲間はずれになるからだ。チューリップ組の女子だけの秘密なの、ママにもそういうこと、あったでしょう？

娘に真顔でそう言われると、わたしはもうあきらめるしかない。わたしには、五歳のときに母親に秘密にするようなことはなかったけれど、

そんなことを言ったら娘にあきれられてしまう、だって、あたしとママとでは育ったカンキョウとか、いろいろと違うじゃないって。それに娘が幼稚園で仲間はずれになるようなことだけはやはり避けたい。それじゃなくても、父親のいないうちの子は特別扱いされがちなのだ。

ママ、たなかさんはね、とつても親切なの、と娘はベッドの中で言う。たなかさんのやさしさについてが娘の最近の夜のテーマだ。

だって美嘉ちゃんがね、たなかさんのiPhoneで電話をしてもメールしても、嫌な顔ひとつしないんだから、あたしたち、すごくうらやましいの。

美嘉ちゃんはたなかさんととくべつ仲がいのね、とわたしが言うのと、娘はちよつと困ったような顔になって、だって、たなかさんとはみんな、仲がいいのよ、平等なのよ、と、少しだけ興奮したように答えた。

ある朝、娘を幼稚園に送り届けた帰り道に、わたしは美嘉ちゃんのお母さんに会う。いい天気ですね、と声を掛けると、美嘉ちゃんのお母さんは、そうかしらというふうにちらつと空を見上げた。

わたしは気にかけていたことを思い切って切り出してみる、そういえば、子どもたちは、みんな、美嘉ちゃんとたなかさんの仲がうらやましいようですね、娘が話していました、と。

美嘉ちゃんのお母さんは、つけまつげの美しい黒い瞳でわたしをしばらくじつと見つめたあと、くると背を向けると、何も言わずに行ってしまった。美嘉ちゃんのお母さんが去ったあとには、GucciのENVYのきつい匂いだけしか残らなかった。

その日を境に、いろいろなことが変わった。最初に娘がわたしと口を利かなくなった。幼

稚園から帰ってきて、迎えにきた美嘉ちゃんとすぐにどこかへ出かけてしまう。どこへ行くの？ と訊ねても、娘の代わりに美嘉ちゃんが、たなかさんのところ、とだけ答える。それ以上はわたしには、立ち入ってほしくないという顔をして。

娘の友達のお母さんたちがわたしに対してよそよそしくなったのもその日からだ。話しかけても、必要最低限の返事しか返ってこない。何人かで話しているときは、すぐにわたしの知らない話題に移ってしまう。

とくに、そう、たなかさんだ。

たなかさんが中庭の掃除をぜんぶ引き受けてくれただとか、たなかさんが娘たちの宿題の面倒を見てくれただとか。そんなこと、わたしはひとつも知らされていない。まるで、わたしとお母さんたちの間にたなかさんが立ちほだかつて、わたしから何かを隠しているみたいだ、で

もいつたい何を？

とうとう我慢しきれなくなつて、秋の授業参観の後のPTA集会のときに、わたしはたまたま隣に座つたお母さんに訊いてみた、たなかささんつていつたい何をしている方なのですかと。

そのお母さんはわたしのほうをちらりとも見ずに、静かに席を立ち、別のお母さん（美嘉ちゃんのお母さんの一番の親友で、クラスのリーダー格のお母さんだ）のところに行つてしくしくと泣き始めた。

その日、誰一人としてわたしに話しかけてくれるお母さんはいなかつたし、先生がたも、わたしをそこにいないものとしてふるまつた。わたしにはなすすべがなかつた。

だれもかれも、娘さえも、わたしから遠ざかつていく。世界にはわたしと、たなかさんだけしか存在しないかのようだ。

わたしはたなかさんを憎み始めた。そしてたなかさんを憎めば憎むほど、わたしはますます世界から遠ざけられ、疎外され、憎まれるようになっていった。

わたしはしだいに食欲をなくし、眠れない夜を過ごすようになった。たまに眠れた夜には、夢にかならずたなかさんを見た。たなかさんは、わたしの真正面に立ち、わたしの娘を脇に抱え、黒光りする真新しいiPhoneでわたしにしつこく電話をかける。そして何度も何度も、わたしが誰かわかりますか？ と訊いてくる、わたしそつくりの顔で、わたしそつくりの声で。

答えられないわたしは、しだいにこの世界から姿を消し、やがて、朝が来ても二度と醒めない、たなかさんの夢に閉じ込められる。

街

……この道の果てにはなんにもないんじゃねえか——つて親父がよく言つてた。川も井戸も干あがり、ひからびた地面には萎びた雑草がちらほら。……ここにやあ、野うさぎもトカゲも、禿鷹さえいやしねえ。こんな石切り場みてえな土地にや、種もまけねえ。まだあの空のほうが耕すにはずつとましだ。切株を掘りおこす手間だつていらねえし。

いまでも、おれの耳の奥には石畳にひびく硬いあしおとが聞こえる——つて親父がよく言つてた。街は、声の木霊でいっぱい。ときどき犬の吠える声。だけど、どの家も空っぽ。すえた臭いや溜息、追憶のしみこんだ壁はくろずんでいた。熱い風に溶かされ、まるで街は湯気のように。……あしおとは擦りきれた声みてえに歩いているが、ときどき立ち止まって、あちこちの戸をたたく——沈黙のあと、の明の鐘のように。

おれたちは街から追われたのか、それともこれから帰つていこうとしていいのか——訊こうとおもっているうちに、親父はぽっくり逝つちまった。……石ころだらけの道の途中で——親父自身、なにがなんだかわからないうちに。……地面に穴を掘りながら、おれは天をふりあおいだ。いまでも、おれはときどき空を見あげる。

遠くのほうで犬の吠え声を聞いた——風のせいだろう、きつと。……道がのぼりになると、睡魔がおれの背後から近づいてきた——なにしろ明け方からずつと歩いてきたんだ。……目をとじると、あしおとは剥がれ落ちた影のように薄あかりの道におれをおいてきぼりにしたまま勝手に先に行つちまう。

……ときどき思うんだ——おれも親父のように本当は地面の下にいるんじゃないかって。

同人住所

相沢正一郎 / 〒189-0024 東京都東村山市富士見町3-17-24

一色真理 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

伊藤浩子 / 〒403-0016 山梨県富士吉田市松山3-4-222-201 宮下方

岡島弘子 / 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302

そうかわせみ、Vol.10 2013年11月5日発行

頒価500円

編集：相沢正一郎

発行：そうかわせみ、の会 〒201-0002 東京都狛江市東野川3-17-2-302 一色方

印刷：遠藤印刷 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-9

表紙：相沢育男
